



With you

ウィズユー

日本国連HCR協会ニュースレター

No.2 2004年 第2号



「やっと自分の国で自分の家に住めて嬉しいです。これから一生懸命勉強して、アフガニスタンの人々のために、水に関するエンジニアになりたいです」

パキスタンの難民キャンプから帰還したモハメッド少年

(2ページの「アフガニスタンからありがとう」に続く)

CONTENTS

- アフガニスタンからありがとう 2
- 6月20日は「世界難民の日」
- アンジェリーナ・ジョリー (UNHCR 親善大使) 現地訪問日記 3
- 支援者と援助現場を結ぶ
- ソマリアからのメッセージ 4
- 10名の「助っ人講師」誕生 5
- 支援者の声
- 難民支援のチャリティイベントを企画してみませんか？
- ご寄附の方法いろいろ
- 対談：沼田早苗 & 宮崎京 6



6月20日は「世界難民の日」



アフガニスタンからありがとう 「僕の家が建ったよ！」



UNHCR / M. Shinohara



UNHCR / M. Shinohara



UNHCR / Y. Takashima

アフガニスタンのUNHCRヘラート事務所で活躍する高嶋由美子さんから現地レポートが届きました。「アフガン帰還難民に家を！」の募金キャンペーンにお寄せいただいた皆様のご寄附がアフガニスタンで芽生え、花を咲かせようとしています。

アフガニスタンにおけるUNHCRの援助活動のひとつに、「自分の力で建てる自分の家、自分の国だから自分でやる、でもそれがとても困難だからUNHCRが自立のためのお手伝いをする」という住宅再建プロジェクトがあります。アフガニスタンでUNHCRは、2002年には約3万戸、2003年には約5万2000戸、そして2004年には2万戸を目標に自立のための援助を行っています。

モハメッド君(11歳)は、両親と一緒に、パキスタンのペシャワールにある難民キャンプから、2003年に帰ってきました。3年間いたキャンプでは土埃の中、テントでの生活が続きました。やっと帰ってきたカブール県のミヤパチャコット町では、道路沿いやその近くの家は、全滅していて、学校の横にあったモハメッド君の家も、壁の一部をのぞき、完全に破壊されていました。

しばらくの間、モハメッド君は家族と一

緒に近くのモスクで生活していましたが、UNHCRとBRR/ARДУというアフガニスタンのNGO(非政府組織)が協力して、家の再建を支援するプロジェクトの受益者に選ばれました。モハメッド君の家族は、家を建てる基本的な道具(シャベルやノコギリ、釘など)窓枠(2つ)窓ガラス、ドア(1つ)や木材(梁など約24本)の他に、家の土台などを作るために必要な現金の一部(約50ドル)を受け取りました。

その日から、BRR/ARДУの技術者の指導のもとで、家の設計や日干しレンガ作り、屋根にのせる小枝集めなどが始まりました。モハメッド君も、学校から帰るとすぐ父と兄の手伝いをしました。「2カ月かかってやっと念願の自分の家が完成しました。たった2部屋の家ですが、これからお金がたまったら、もっと部屋の数を増やしていく予定です」とモハメッド君は話してくれました。

日本国連HCR協会を通じて日本の皆様

からいただいたご寄附は、モハメッド君の家族のようなアフガン帰還民の住宅再建に役立てられ、彼らの故郷での新しい生活の確実な一歩となっています。1回のお昼代を、1回の映画代を、1回の旅行代を寄附して下さった日本の皆様の善意がこのようにしっかりとアフガニスタンで息づいています。

モハメッド君は言いました、「やっと自分の国で自分の家に住めて嬉しいです。これから一生懸命勉強して、アフガニスタンの人々のために、水に関するエンジニアになりたいです」。



高嶋由美子さん
(UNHCRヘラート事務所、
フィールド担当官)

6月20日は「世界難民の日」 今年のテーマは“故郷と呼べる地”

2000年12月、国連総会で毎年6月20日を「世界難民の日」(World Refugee Day)とすることが決議されました。「世界難民の日」を制定することにより、難民の保護と援助に対する世界的な関心を高め、UNHCRをはじめとする国連機関やNGO(非政府組織)による活動への理解と支援が広がることが期待されています。たとえば「母の日」に特別な思いを母親に寄せるように、「世界難民の日」には難民となった人々の苦難に思いを馳せてみてください。

UNHCRでは毎年、難民の日のテーマを設定しています。過去のテーマは「難民の子ども(2001年)」「難民女性(2002年)」「難民の青少年 未来をつくる(2003年)」でした。4回目となる今年は難民問題の恒久的解決(本国自主帰還)に焦点をあて、

「故郷と呼べる地」をテーマとしています。

「皆さん、想像してみてください。自分の家が破壊されてしまった、あるいは地雷が多くて他の地域で生活を始めなければならない、そんな状況を。アンゴラの帰還民は今、故郷を再建するために、皆さんの援助を必要としています。」(UNHCRアンゴラ・ルアウ事務所のフィールド担当官アカシオ・ジュリアオ)

UNHCRでは多くの帰還民を援助しています。たとえばアフリカのアンゴラでは27年におよぶ戦闘に終止符が打たれた2002年4月以降、多くの難民や避難民が故郷での新しい生活を始めようとしています。帰還と再定住が成功しなければ、平和も定着しません。UNHCRは現地政府に協力し、診療所

や学校、水道施設の再建、食料や農機具の支給などを行っています。「以前は市場に何もありませんでしたが、今は少しずつ見受けられるようになりました。UNHCRが支給した農機具が役に立っているようです」とアカシオ・ジュリアオは言います。

リベリア、スーダン、ブルンジを始めアフリカ9カ国で難民の帰還が進むと期待されていますが、それを支援する資金が必要額の半分も確保されていません。



UNHCR / S. Hopper 2003

帰還民登録をしているアンゴラ難民

アフリカの帰還民支援のご寄附は「アフリカ」とご指定ください。

「世界難民の日」写真展のお知らせ UNハウス(国連大学ビル)にて「世界難民の日」写真展を開催します。今年は写真家の沼田早苗さんの写真も展示されます。(入場無料) 場所: 東京都渋谷区神宮前5-53-70 UNハウス(国連大学ビル)1・2階 期間: 6月18日(金)~7月14日(水) 時間: 10:00~18:00(土日休館) UNHCRの日本語サイトもご覧ください。http://www.unhcr.or.jp

「世界難民の日」記念報告会 ~現場からの声~ 左記の写真展に合わせて報告会を行います。日時: 6月18日(金)15:00~16:30(予定) 場所: UNハウス(国連大学ビル)2階レセプションホール 上記の高嶋由美子さんによる講演などがあります。

アンジェリーナ・ジョリー (UNHCR 親善大使)

現地訪問日記

2003年8月21～24日、ジョリーはロシア連邦に滞在し、北コーカサス地方に位置するイングーシ共和国に避難しているチェチン出身者や、北オセチアのグルジア難民のキャンプを訪れた。モスクワでは、アフリカやアフガニスタン出身の難民が暮らす家を訪問し、排斥や不安定な身分といった問題に耳を傾けた。

その日記には、現場での仕事に従事する人道支援スタッフ、とりわけコーカサス地方で頻発する誘拐や銃撃、そして8月19日にバグダッド国連本部の爆撃で犠牲になった人々への思いが綴られている。同年10月5日にソマリアでアナレナ・トネリー医師(60歳、2003年ナンセン賞受賞)が、11月16日にはアフガニスタンでUNHCR職員ベティーナ・グアラルル(29歳)が犠牲となり、ジョリーはその死を悼んだ。

「もし、カリフォルニアやロンドンやニューヨークで、何千人もの人が毎日亡くなったとしたら、社会の反応はまったく違うと思う。アフリカ、チェチン、バルカン諸国、中央アジア、コロンビアといった場所に暮らす人々の死に、世界は慣れっこになってしまっ



UNHCR / T. Makeeva

ているのかもしれない。聞き慣れたニュースだから？犠牲者が多すぎるから？あるいは私たちには何の利害もないと感じるから？もちろんそんな考えは誤りだ。われわれが彼らから得

るものは多い。大切なのは私たちはみんな平等であり、同じように家族がいるということ。そして、私たちの支援を必要としていること。特にチェチンのような地域の人々が私たちに必要としていることを忘れてはならない。

2003年12月には、ヨルダン東部にある難民キャンプを数時間訪れた。住民の多くはパレスチナ出身だが、ソマリア、スーダン出身者など約500名が、昨年の春以来イラクでの紛争を逃れて身を寄せている。ジョリーは、彼らの言葉に耳を傾けた。

母親を失ったソマリア女性は「何の打開策もない」と言い、パレスチナ女性は「家に帰りたけれど帰れない。このキャンプから出る方法も時期もわからない」と



UNHCR / T. Makeeva

付け加えた。1人の男性が手を震わせながら言った、「私たちは家族を失った。人間らしく生きる道を見つけるために、国から国へと流れてきた。しかし、今、希望さえも失おうとしている。」

(UNHCR本部ホームページより抜粋)

2001年8月にUNHCR親善大使に就任して以来、ジョリーは世界各地のUNHCR援助現場を訪れ、その体験を日記に綴っている。その一部が、“Notes from My Travels”(日本語版『思いは国境を越えて』)として出版された。さらにロシアやヨルダンを視察した体験はUNHCR本部ホームページに掲載されている。

<http://www.unhcr.ch>

支援者と援助現場を結ぶ

緊急報告! スーダン難民の現状



伊藤礼樹さん

スーダンのハルツーム事務所での上級保護官(Senior Protection Officer)として勤務する伊藤礼樹(いとうあやき)さんが3月末に一時帰国した際、チャド緊急事態についてお聞きしました。

「チャドとの国境近くの乾燥地域(ダルフール)を今年2月に視察する機会がありました。そこではアラブ系武装勢力に非アラブ系住民が迫害されています。ちょうど旧ユーゴスラビアで起きた民族浄化と同様な状況が起きてい

て、60～80万人が国内避難民となっています。現場へのアクセスが困難な状況が続く、国連やNGO(非政府組織)が対応に苦慮しています。」

「戦火のボスニアでも援助活動に従事したことがありますが、旧ユーゴスラビアと違う点は、スーダンには国際社会の注目が集まっていないということ。」

隣国チャドにスーダン難民11万人が流入するという緊急事態に対処するため、UNHCRは2004年分資金として20億円を超える緊急アピールを出しています。

越境攻撃にさらされる国境付近にいる難民をより安全な内陸部のキャンプに緊急移送する必要があります。これ



砂嵐の中のスーダン難民

UNHCR / H. Caux

までにUNHCRは協力NGO(非政府組織)と3万人以上を移送しました。しかし、道路の通行が不可能になる雨季が5月末頃から始まるため、援助活動はさらに困難になります。

親善大使のアンジェリーナ・ジョリーも、自ら5万ドルを寄附した上で、個人や企業からのさらなる支援を呼びかけています。

ソマリアからのメッセージ

「教育を受けて、将来自立できるように...」

女子の就学率が低いアフリカ、なかでも長年の紛争で疲弊したソマリア難民および帰還民の女子教育を支援する事業をUNHCRは進めています。

UNHCR本部職員リンダ・メリオーが2003年5月に現地で取材したソマリア帰還民の家族の話を紹介します。



UNHCR / L. Merleau

メリオー：ソマリランド*に戻ってどのくらいになりますか？

母親（35歳）：約1年です。

メリオー：どこから戻られたのですか？

母親：エチオピアです。

メリオー：エチオピアは何年ほど避難していたのですか？

母親：約10年です。

メリオー：故郷へ帰還するとき、UNHCRからはどのような援助を受けましたか？

母親：UNHCRは、補助金、輸送手段、食糧を提供してくれました。

メリオー：エチオピアに避難していたとき、UNHCRからどのような援助がありましたか？

長男（17歳）：エチオピアではUNHCRの援助で学校に行くことができたのでありがたかった。教育は、とても大切だと思います。

メリオー：なぜ、ソマリランドに帰ることを決めたのですか？

母親：私は母国を愛しています。故郷に戻れてとても幸せです。

メリオー：今は何をされていますか？

母親：何もしていません。ただ、3人の子どもを育てているだけです。

メリオー：ご主人は不在なのですか？

母親：私は未亡人です。夫は1年前に亡くなりました。

メリオー：子どもたちの将来に何か託すこ

とはありますか？

母親：教育を受けて、将来は自立できるようになって欲しいです。

メリオー：あなた自身の将来についてはいかがですか？

母親：私自身の持つ知識を利用して、より良い生活を築けるよう願っています。エチオピアの農業大学で学ぶ機会があり、知識を習得しました。

メリオー：今も勉強を続けているのですか？

母親：中断しました。修了にはもう1年必要です。

メリオー：なぜ中断したのですか？

母親：病気になったからです。元気になったら学校に戻りたいのですが、いつになるかわかりません。

メリオー：UNHCRの援助がなかったら、ご家族やあなた自身はどうなっていたと思いますか？

母親：もっと苦しい思いをしていたと思います。

長男：妹はまったく教育を受けていません。ソマリアの文化のせいです。女子は学校に行かないのです。でも弟は小学校に編入できました。

メリオー：エチオピアにいたとき、なぜ学校に行かなかったの？

長女（15歳）：いろいろと家事を手伝っていました。

メリオー：学校に行きたいですか？

長女：はい。

メリオー：読み書きは習っていますか？

長女：まだです。

メリオー：もし機会があれば、勉強したいと思いませんか？

長女：はい。

メリオー：お母さんは勉強した方がいいと言っているの？

長女：はい。そう言っています。

メリオー：将来、何になりたいですか？

長女：まだわかりません。

メリオー：人生における夢は何ですか？

長女：これから、少しずつわかってくると思います。

メリオー：結婚したいですか？

長女：いいえ。

次男（13歳）：僕は13歳だけど、2年生になります。ソマリランドでは今年から勉強を始めたから、クラスメートのみんは僕よりかなり年下です。

メリオー：何を勉強していますか？

次男：ソマリア語と英語です。

* ソマリランドとは、アフリカ東部海岸地方を指し、ソマリア、ジブチとエチオピアの一部を含みます。

注）この家族にはこのインタビューがUNHCRの募金活動に使われることを事前に説明し、承知していただいています。

皆様の温かいご支援に感謝いたします

日本国連HCR協会では、2004年の募金活動を以下の3つを中心に進めています。皆様からこれまでにお寄せいただいたご支援は次の通りです。



1 アフガン帰還民に家を！

帰還難民の生活は、まず自分の家の再建から始まります。2002年10月に始めたキャンペーンを2004年も継続しています。

累計：9553万1163円

寄附件数：3020件

（2002年10月～2004年3月31日）

2 アフリカ難民に水を！

難民キャンプでは安全な水を確保することが非常に困難です。水の浄化や浅井戸の掘削を支援しています。

累計：942万1023円

寄附件数：979件

（2003年10月～2004年3月31日）

3 アフリカ難民に教育を！

難民の子どもたちが教育の機会を得られるように、さまざまなプログラムを支援しています。

累計：1645万9808円

寄附件数：600件

（2003年12月～2004年3月31日）

10名の「助っ人講師」誕生

第1回「助っ人講師養成講座」報告

第1回「助っ人講師養成講座」(全3講座)が無事終了しました。以下のテーマに沿った講義と活発な意見交換が行われました。

第1セッション:

UNHCRの設立経緯や活動、HCR協会の任務や役割

第2セッション:

世界の主な難民問題や募金キャンペーンなどの支援方法

第3セッション:

日本における難民問題および草の根支援の輪を広げるための具体案

受講者には、会社員、学生、主婦、学校の先生、メディア、宗教関係者、ボランティア活動に携わる人など、多種多様な顔ぶれが揃い、われわれ協会職員も学ぶところが多くありました。最終日には、修了証授与とともに10名の「助っ人講師」が誕生しました。日本における難民支援の輪をさらに広げていくための活躍が期待されます。



UNHCR駐日地域事務所代表ビルコ・コウルラ氏(後列真中)と共に修了証を手にする助っ人講師

助っ人関連イベント

第5回「助っ人会員と支援者の集い」

日程 6月18日(金)
時間 15:00~18:00(予定)
場所 UNハウス2階レセプションホール
15:00~16:30は「世界難民の日」記念報告会です。(2ページ欄外お知らせ参照)

第2回「助っ人講師養成講座」

日程 7月15・22・29日(木)
時間 17:00~19:00
場所 UNハウス6階会議室
対象 助っ人会員の方
全3講座参加可能な方

定員 10名

*募集要項をご希望の方は、HCR協会へEメールかFAXでお申し込みください。

支援者の声



HCR協会にお寄せいただいた皆様のメッセージを紹介するコーナーです。励ましのお手紙、お叱りの言葉、お問い合わせなどをご本人に連絡のうえ、掲載します。

東村山市の天内明枝さんからのお葉書

4年前から年金生活になり募金することができなくなりました。今は公社住宅の古くて狭いお部屋をお借りしています。一生自分の家を持つことができずに終わると思います。前回お送りいただきました資料で「アフガン帰還難民に家を！」を目にした時から、ずっと頭から離れませんでした。昨年4月から月に2日、市役所で働くことができ、やっと家のお金が貯まりましたので今送金しました。とても嬉しいです。日本では持つことのできなかった「我が家」の夢をアフガニスタンに。

多額のご寄附をありがとうございました。実際に住むことは不可能ですが、アフガニスタンにご自分の家を購入するような感覚で、より多くの人々にご協力いただければと思います。(編集部)

.....難民支援のチャリティ・イベントを企画してみませんか?.....

全日本空輸(ANA)は、ヨーロッパ各支店が主催したコンサート全6会場で集められた寄附金を、3月19日にUNHCR本部へ寄贈してくださいました。

今年、国内で予定されている主なチャリティ・イベントを紹介します。

3月2~7日 ロバート・ハインデル展
(東京・代官山ヒルサイドフォーラム)

4月1~2日 朝日チャリティコンサート
~ 石井好子とシャンソンの夕べ
(東京・有楽町 朝日ホール)

5月20日 第20回じゃがいものお会チャリティショー*
(東京・渋谷 NHKホール)

5月26~30日 三菱ダイヤモンドカップゴルフ2004(茨城・大洗ゴルフ倶楽部)

8月18・20日 パレエ公演「ジゼル」*
(神奈川県民ホール)

10月8~10日(予定) 世界新体操クラブ選手権 イオンカップ2004(東京体育館)

11月18~21日 2004ダンロップフェニックスプロアマチャリティトーナメント
(宮崎・フェニックスカントリークラブ)

*UNHCRおよび「難民教育基金」を支援

ご寄附の方法いろいろ

日本国連HCR協会はUNHCRの日本での正式な寄附窓口です。

HCR協会では、以下の方法でご寄附を常時お受けしています。ご寄附は、特定寄附金として所得から控除できます。

郵便局(振込手数料は協会負担です)

郵便振替口座: 00140-6-569575

加入者名: HCR協会

銀行 UFJ銀行 青山支店 普通

口座 5251034 三井住友銀行

渋谷駅前支店 普通口座 3478195

口座名(・共通): エイチシーアールキョウカイ

銀行からのお振り込みはお名前的一部分しか表示されません。受領証やニュースレター発送のため、必ず皆様のご住所等をHCR協会へお知らせください。

毎月倶楽部

郵便局または銀行口座から毎月自動引き落としによるご寄附。1000円以上(千円単位)でご指定ください。ご希望の方には申込書をお送りします。

相続財産のご寄附

相続財産を得た方が、相続税の申告期

限内にHCR協会に寄附した場合、課税価格の計算の基礎に算入されません。また遺贈を検討されている方は当協会にご相談ください。

インターネット募金

HCR協会のホームページからご寄附をお受けできるようになりました。ホームページでお申し込み後、郵便局やコンビニでお振り込みいただける用紙がお手元に届きます。あるいはクレジットカードや銀行振込も可能です。詳しくはホームページをご覧ください。

<http://www.japanforunhcr.org>

子どもたちの真剣な眼差し

2004年1月下旬、写真家の沼田早苗さんと2003ミス・ユニバース®・ジャパンの宮崎京さんが、主にミャンマーからの難民であるカレン族やカレニー族が住むタイのタムビン難民キャンプを訪問しました。お二人に難民キャンプで感じたことをお聞きしました(タイの難民キャンプについては「With you」No. 1もご覧ください。http://japanforumhcr.org/www/withyou.html)

編集部：お忙しいところ、ありがとうございます。難民キャンプは今回の訪問が初めてですか？

沼田：JICA(独立行政法人国際協力機構)の関係で途上国の写真を撮る機会はありましたが、難民キャンプを訪問するのは初めてです。

宮崎：私はキャンプ訪問はもちろん、難民の方にお会いするのも初めてでした。

編集部：日本に住んでいるとなかなか「難民」という言葉がピンとこないかもしれませんが、今回訪問して何かご自分の中で変わりましたか？

宮崎：実は今回の訪問までタイに難民がいることも知らなかったんです。確かに一般の人々にはわかりにくいかもしれませんが、「難民」って漢字で書くど「難しい人」みたいなイメージになってしまっています。

沼田：写真家のセバスチャン・サルガド氏の写真もよく見ますが、タイの難民キャンプは最悪の状態ではないかもしれませんが、でも7年も難民生活を強いられているわけですよね。私だったらもっと落ち込んでしまうでしょうね。

宮崎：自分が難民になることを想像するのも難しいですね。私は日本で何不自由なく生活していますし、パスポートひとつで日本と外国を自由に出入りできますけど、難民の人たちはこのキャンプから出られないし、いつ故郷へ帰れるかもわからないのですから。

沼田：帰国後のことを考えてでしょうか、非常に教育熱心ですね。子どもたちは悪い環境のなかで、一生懸命勉強してましたよ。それがかえってけなげに感じられました。



宮崎 京さん(右)

宮崎：日本の子どもたちは当然のように学校に行けるから幸せですね。キャンプの学校で「化学を勉強すると日本ではどのように役に立つのか？」ときかれて答えに困りました。熱心に勉強しているのがよく伝わってきました。だからこそもっと勉強できる環境を整えてあげたいですね。

沼田：キャンプでは女性のほうが大変そうでした。タムビンでは9000人のうち約半分は子どもでしょう。ご飯も食べさせないといけないし。逆に男性はひまそうでした。キャンプ内では労働が許可されていないから、責めることはできないけど。カメラを向けるとちょっと気まずそうでした。何年も働いていないので、自信をなくしつつあるのかもしれない。

宮崎：職業訓練のプログラムがあって、料理とか裁縫など、皆さん意欲的に参加していました。でも、国に帰れたとしても、土日休んで月曜日からまた働くというような規則正しい生活に戻るのも大変でしょうね。

沼田：いつ帰れるかわからないのはつらいでしょうね。

宮崎：楽しみもないですし。でも、「タナカ」というお化粧みたいな粉を顔に塗っていました。苦しい生活のなかでも、彼女たちなりのお洒落なのかもしれません。

沼田：人数も男性より女性のほうがかなり多かったですね。

編集部：キャンプでは女性や子どもが目立ったようですが、実際、難民の8割は女性と子どもと言われています。沼田さん、宮崎さん、それぞれの立場で今後、難民の人々を応援していただきたいと思いますが、何か抱負のようなものは？



宮崎：今回初めて難民の人とお会いして難民問題がもっと身近に感じられるようになりました。私は雑誌の取材やイベントなどのお仕事が多いのですが、世界にはたくさん難民の人々がいるということを皆さんにお話できれば、そしてそれが何か考える糸口になればと思います。

沼田：ファインダーから見る子どもたちの笑顔も素敵でしたが、それよりも子どもたちの興味深そうな表情、真剣な眼差しがもっと印象的でした。最近は活字離れとよく言われますが、写真の訴える力は強いと思います。写真を通して難民問題をアピールできればいいですね。

編集部：今年の「世界難民の日」写真展(2ページ参照)に沼田さんの写真も展示させていただくことになっています。今後ともお二人にはさまざまな形で難民支援にご協力いただければと思っています。どうもありがとうございました。(写真/沼田早苗)

沼田早苗(ぬまたさなえ)：神奈川県生まれ、大竹省二氏に師事、1978年よりフリーランス、雑誌やテレビの取材等を経て、人物写真を中心に活躍。

宮崎 京(みやざきみやこ)：熊本県生まれ、2003ミス・ユニバース®・ジャパン、パナマにおける世界大会で5位入賞。エイズ撲滅や難民支援活動にも参加。

認定NPO法人 日本国連HCR協会
[国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)日本委員会]
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-70
UNハウス(国連大学ビル)6階 UNHCR内
TEL: 03-3499-2450 FAX: 03-3499-2273
Eメール: info@japanforumhcr.org
ホームページ: http://www.japanforumhcr.org

「With you」No.2 2004年 第2号(5月)
発行人: 赤野間征盛
編集: 山本浩、中村恵、井上清治、奥平章子
デザイン・製作: 欄ポイントライン

「With you」副題公募継続のお知らせ 前号でお知らせしました「With you」副題公募にいくつかの案をお寄せいただき、ありがとうございました。どれも甲乙つけがたく、編集部で票が割れてしまいました。そこで公募を継続することになりました。「With you」の持つ意味、UNHCRやHCR協会の活動内容などを考慮して引き続き皆様にご検討いただければ幸いです。